

なぜ勉強するのか

インタビュー

川崎市立稻田中学校
教諭

国家資格キャリアコンサルタント／CDA

齋藤 茂氏

中学校



■自信を持てない生徒たち

中学校で子どもたちを見ていると、どうも自分に自信を持てない生徒が増えてきているように思うのです。自信がないから、主体性を持てず、言われたことしかしようとしてない「指示待ち人間」になる。中学生は学童期から青春期への移行期にあり、自分の興味の対象や価値観などが明確化されていかないと、混乱した状態のままアイデンティティの確立がうまくいきません。

移行できないまま学童期に留まっている生徒が多いような気がします。

学校の教科というのは、基本的に自分たちが知らなかつたことを知つていなくて時間があるはずですが、授業をやつてもそのことの喜び、驚きを感じられない。私は数学を教えていますが、「初めて知ったんだからもっと驚いて」と思うんですけれども、総じておとなしい。中学校は高校入試のための予備校のようで、いい点数、いい評価を取れればそれでいいというようになつてきています。

学校生活の中でいろいろ経験することで、自分が何に興味を持つのがわかってくるようになります。緑化委員会で草花の世話をすることに「植物を育てたりする」という気づいたことは、自分が得意なことに気づくことにもなる。すべて得意だとうことはないし、そうである必要もない。それは経験していかないとわからないし、「仕事」をイメージすることもでききりません。企画みたいなことが

部活動では、小学校までは準備されお膳立てされたお客様状態でやつてきたので、ギャップが大きいようです。活動すればいいだけではなくて、準備やバッックアップをする人がいなければできないことをわかつてほしい。

「委員会とか部活はミニ社会だよ」と何度も繰り返し言っています。生徒たちは「やりたくない」「やつても損だ」と思つてしています。学校生活の中でいろいろ経験するかがわかつてくるようになります。緑化委員会で草花の世話をすることに「植物を育てたりする」という気づいたことは、自分が得意なことに気づくことにもなる。すべて得意だとうことはないし、そうである必要もない。それは経験していかないとわからないし、「仕事」をイメージすることもでききりません。企画みたいなことが

■学校生活の現状

きています。

クラス内の係にしても、生徒たちは分担されたことだけやればいい、できればやりたくなくて、「あの子はやらなければいけないの?」と言うわけです。やらなくていい理由を探している。いろんなことをやることは自分の可能性を広げることにつながるのに、やつたら損をすると考えてしまう。

■自信、自己肯定感を持たせるために

できる子は心配ないのですが、おとなしい子、家で勉強できない子たちは気になります。委員会でも部活でも何か自信になることがあれば「やろう」という気になつてくれるのではないかと思うのです。有能感を持つためには、少しずつ「自分もできるじゃん」という小さな成功体験をさせ、褒め、それを積み重ねることです。ちょっとしたことでも考え方や取り組み方でも褒める。その自信が自己肯定感につながります。頑張ればできるかもそれないと思い始める。

好きなら、「じゃあ企画って何なの?」と具体的に知つていくきっかけになるのが職業レディネス・テスト(VRT)だと思います。

■家庭環境の多様化

家庭も変わってきています。両親はだいたい共働き。シングルペアレントも珍しくない。学習は塾任せ。塾に行つてないからできないんだ」という言い訳をする。学習意欲の低い、家庭学習をしない生徒が増えている。少しの宿題でも、「塾に行くから時間がない」などと言つてやつてこない。一方で、環境ゆえに家庭学習がしたくてもできない、という子もいる。自分の机がなくて食卓でしかできない。昔より家庭環境は多様のようです。

自己肯定感を持てない場合、以前の校内暴力のように暴れることはなくなりました。学校に来なくなってしまった子が多くなってきました。休めば休むほど勉強はわからなくなる。そうすると家でゲームでもやつてたほうがよくなってしまう。

■ VRTの導入

「ああ、こういう職業、仕事があるのか」というのがわかり、意識するようになります。

VR-Tは、まずは勉強の動機づけのために使いたいと思つて導入しました。『今授業でやつている勉強も、実は将来仕事に就く時に役立つんだ、そのため勉強しているんだ』というこ

今回は、2年生での職場体験学習の前に実施しました。まず「なぜ勉強するのか」という話を全体でやり、それから検査実施、その後自己採点・集計、

きそな仕事に就いたほうがいい。そのためにはどうしたらいいか。今までできるか」と。あるいは「ものを考えるには、まず基礎としての知識を得て、理解することが必要であって、今はその知識・理解の段階にあるんだ

して、振り返り、みんなで話し合う、いう流れですね。今後は、1年と3年の二度実施してもいいかもしません。二度の結果の違いを比較すると興味深いです。成長しているはずですか。やつぱり一生懸命やると、興味も能力も変わる思います。成長を実感して自信につなげ卒業してほしい。

■教師の意識改革

子どもたちにはキャリアの話をする
んですが、一方で先生方にもっとキャ
リア教育の大切さ、必要性を理解して
もらうように私が努力をしなければい
けないのかもしれません。

「齊藤先生はああ言つてゐるけど、なんでもこんなことしなきやいけないんだ、忙しいのに」と思つてゐる先生もいると思いますよ。あるいは悩んでゐる先生も。VRTに出会うまでは自分もずっと悩んでいましたから。中学校は高校の予備校であつて、余計なことしても無駄じやないかと。でも、学校に

期待

れたことがあります。VRTも他の先生、学年主任の先生にメリットを説明し、校長の了解を得て、それで「じゃあやりましょうか」ということになつたわけです。

は、まずは目の前の宿題とか「怒られるから」といったことに気が向いてしまう。それに気づかせるのが先生の役割でもあると思うんですが、先生方の心になかなか入っていけない。やつぱり難しいですね。

でも、何人かの先生に「研修でキャラ教育について話を聞いてきましたが、斎藤先生がいつも言つてゐるのは

VRT導入後は、教科のテストの点数ばかり気にするような感じではなくなりました。VRTでは、うになつてもらいたい。

VRTの実施後のアンケートでは、「自分の思っている職業と同じもので良かつた」「違うものもいいんだと思った」、あるいは「いろんな人がこんなふうに思っているのがわかつて良かった」というものなどがありました。

VRTは、「自分はこういうものに興味があるな」という自己理解のきっかけとなり、「それを将来仕事に結びつけていくには、もっと勉強しなきやだめだな」と気づいて、学習意欲につ

は無駄なものは一つもない。生徒自身に
とってチャンスがいたるところに、
ろがつていてるのだから、進んで「はい、
やります」とやれば、その中で自分の
いいところが見つけられる。でも実際